

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	安部公房『ひげの生えたパイプ』論：児童向け連続ラジオドラマにおける「英雄」と投書
Author(s)	奥村, 尚大
Citation	近代文学試論, 57 : 21 - 34
Issue Date	2019-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/50488
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050488
Right	
Relation	



安部公房『ひげの生えたパイプ』論

— 児童向け連続ラジオドラマにおける「英雄」と投書 —

奥村尚大

はじめに

『ひげの生えたパイプ』は一九五九年五月から九月までの間、NHK第一放送で毎週月曜日から金曜日の夕方6時5分から6時20分に〈子供の時間〉枠で放送された児童向けの連続ラジオドラマである。全八十五回にわたる作品で、量的には全集一冊分に当たり安部公房の作品の中でも特に長大なものである。『毎日新聞』において取り上げられていること¹⁾や、テーマソングが紹介されていること²⁾、『冒険王』において小林一夫の絵で漫画化され連載されたこと³⁾からもその人気が伺える。安部公房が書いた連続ラジオドラマとしては『キッチン・クッチュケツチュ』(一九五七年六月)に続く二作目であり、この後『お化けが街にやって来た』(一九六〇年九月〜一九六一年九月)、『砂の女』(一九六三年三月〜四月)と続く。

安部公房研究において小説以外によって発表された作品への関心は高まっている。例えば、本論に関係するラジオドラマであれば、木村陽子による「リテラリー・アダプテーション」という概念を使った論⁴⁾や、守安敏久による分析などがある⁵⁾。また、鳥羽耕史は『安部公房 メディアの越境者』において『ひげの生えたパイプ』と『お化けが街にやって

来た』が論じられなかったことに関して、「全集第一〇巻の一冊分になる『ひげの生えたパイプ』と、全集第一三巻、第一四巻の二冊分になる『お化けが街にやって来た』という、子供や主婦向けの連続ラジオドラマは、安部の作品中最も長大なものになっており、分量的には、こうしたオリジナル作品が圧倒的なのだ。残念ながら本書では論じられなかったこれらの作品も含めて安部の全体像を描きだすことは、こうした活動(引用者注:メディア横断的な活動)と文学者・安部公房との接点を探る意味での次の課題である」としている⁶⁾。しかしながら、管見の限り『ひげの生えたパイプ』に関する分析は行われていない。

筆者が考えるに、『ひげの生えたパイプ』と『お化けが街にやって来た』に関する分析は安部公房の小説以外のメディア作品を考える上で特に重要なものである。もちろん、鳥羽耕史の言うようにオリジナル作品と長大な分量というのも二作品の重要な特徴であるが、連続ドラマという性質は注目されてよいと考える。『キッチン・クッチュケツチュ』や『お化けが街にやって来た』などの安部公房の他の連続ラジオドラマ作品と比べた場合、『ひげの生えたパイプ』は聴取者の投書を作中に登場させたという特徴がある。

また、日高昭二が安部公房をポオとマーク・トウェインの系譜の中に

位置づけている。加えて坂堅太によって安部公房が「アメリカ」という視角⁷から「大衆社会化の積極性を重視し、そこから新しいナショナルリズムの可能性を構想していた」ことが指摘されている。⁸これらから、トウエインやアメリカとの影響関係を論じる必要性があると考えられる。詳しくは後述するが、安部公房が「コドモとマス・コミ」において「スーパーマン」と「トム・ソーヤ」に「児童ものの能動性」を見出し⁹ていたことを考えると、安部公房の児童向け作品を論じることでアメリカと安部公房の関係についても新しい視座を見出すことができる¹⁰と考える。

後述するが「セカイ系」¹⁰に類似する作品構造も見られ、いわゆる現代的なコードによっても読むことができる作品であると考ええる。つまり、『ひげの生えたパイプ』は様々な視点から読むことのできる作品であると考える。

本論においては、子供を囲む当時の言説状況と主人公の少年津久井太郎の人物造形を分析する。そして、その後、作品の展開が「セカイ系」や東浩紀の述べる「感情のメタ的物語な詐術」¹¹に接近していることを確認し、それに関係して子供からの投書や積極的に現実社会の事物を取り込んだことの意義を探る。

一、津久井太郎の人物造形

安部公房は津久井太郎の人物造形について「しかし、筋のはこびは、あまり、よい、子ならざる子供を主人公にしたため、むしろ合理精神に逆行する事件が多くなり、しぜん子供たちは、いやでも強い反応を示さざ

るをえなかつたわけだ」と述べている。¹²つまり、「よい子ならざる子供」として意図的に津久井太郎は造形されたのである。

そのうえで作品の分析に移りたい。『ひげの生えたパイプ』は、魔法の力を持つパイプを手に入れた主人公津久井太郎が、その力を使って様々な事件を解決したり、逆に、魔法の使い方を誤って事件を起こしてしまったりする物語である。前半部は貝塚発掘の最中に大発見をしようと考え、魔法で古代バビロンの粘土板を発掘してしまったために騒ぎを起こしてしまう物語や、開校記念日の劇にパイプが作ったためたらしめな台本で参加し、校長の誤読に近い評価によって優勝してしまうという物語など、数話単位で解決するいくつかの短い物語を積み上げる形式になっている。パイプが太郎に学校をやめさせて、魔法の力で世界から学校を消すという使命を「オトギの国」から与えられていたことを明かした後の、作品後半部においては、太郎の父が技師を務める九州のダム建設が物語の中心となる。ここではパイプを選び学校をやめるか、学校をやめずに魔法の力を失うかという葛藤が描かれる。そして、最終的に太郎は父の言葉を受けて魔法の力を失うことを選ぶ。

以上が作品の梗概である。ここで考えたいのは前半部においては津久井太郎が「手柄」¹³を求めておりそれが物語を動かす原動力となっていることである。¹³そして、それは漫画的な空想と結びついていた。¹⁴例えば、「ぼくはどうしても、大発見がしたいんだ！ たとえばさ、洞クツの入口なんかをさぐりあてて、その中に入っていったら、金貨や宝石なんかザクザクして……」（九話）という津久井太郎の台詞がある。そこから、現実味を欠いた漫画的な太郎の空想と「大発見」という手柄を求める姿勢が読み取れる。また、それが貝塚発掘のエピソードでの太

郎の動機の一つとなっている。そして、安部公房はそのような漫画的な空想に関して「コドモとマス・コミ」において以下のように述べている。

コドモがスーパーマンにあこがれを感じるのは、それこそ共通項なんだ。あれは、なにも英雄になろうとか、殺伐を好むというのではなく、単なる独立心からなんだな。つまり、コドモは家庭とか学校という環境のなかで、つねに保護されている。保護といえど聞えはいいが、一種の依存、あるいは従属の状態にあるわけだ。そこで、そうした状態からの独立心を形象化したものとして、超人的なスーパーマンを理想像とするんだな。いいかえれば、コドモはその生活のまわりをはりめぐらしている対抗物にたいする、自分自身の力の展開を、スーパーマンにみるのだと思う。

たとえば、「トム・ソーヤ」だって、スーパーマンなんだよ。すべてに打ち克つて、自分の力を発揮してゆく。つまり、力がありあまって仕方がないというところに、コドモのひとつの共通項をみているわけだ。だから、児童文学でも、こうした特質を拡大してゆく方向に向うことによって、逆に、児童ものの能動性がでてくると思うのだ。¹⁵⁾

「コドモとマス・コミ」は座談会「戦後児童文学の諸問題」¹⁶⁾に對抗する形で書かれたものである。「戦後児童文学の諸問題」が『赤銅鈴之助』や『月光仮面』を「高踏的」な立場から批判していると批判し、むしろそのような方向にこそ児童文学の「能動性」があると述べている。安部公房は児童文学者に「生活派」¹⁷⁾と「芸術派」¹⁸⁾という二つのタイプがあることを挙げて、その二つの立場を退け、むしろその二つの立場が俗悪であ

るとして評価し得なかった「スーパーマン」¹⁹⁾などの方向を發展させていくことを選んだ。ここに安部公房の立場の特殊性があると考える。

特徴的なのは「スーパーマン」などを好むことを子供の「独立心」としていることである。『ひげの生えたパイプ』に即して考えると、なんでも思ったものを作りだし、なんでも吸い込むことができるという魔法のパイプを登場させることによって「スーパーマン」のような「力の展開」を描くことに成功し、それは子供の心を挿んだ。安部公房が「コドモとマス・コミ」における議論について「そうしたかんがえにたつて実践する」と述べていることから「スーパーマン」における超人的な力にあたるものとして『ひげの生えたパイプ』に魔法を登場させたと考えられる。一方、津久井太郎の持つ先述の漫画的な空想は「独立心」からのものであると考えられる。つまり、『ひげの生えたパイプ』においては、聴取者側の持つ「独立心」を形象化したものとして魔法を登場させると同時に、「独立心」という聴取者に近い心情を持った人物として津久井太郎を登場させたのである。二つの方向に「スーパーマン」的な特質を拡大させたと考えられる。

パイプ ジャア、貝塚の発掘のとき、大手柄をたてて新聞にのつけてもらえたのは？

太郎 あんなもの、本当の手柄とは言えやしないよ！（中略）

パイプ 劇の優勝は、立派に私のおかげでたてた大手柄でしょう？

太郎 でも君、あれはまぐれ当りだったんだぜ……こんどこそは、なんとかして本当の大手柄をたてたいなア……（四六話）

第四十六話の前半部は、これまでの話を振り返るいわば繋ぎの役目も持っている。ここで重要なのは太郎が「まぐれ当り」のような自分の意図しない方法で手柄を立てることを好まず、「本当の大手柄」を求めていることである。自らが主体となれず、予期せぬ方法で称賛された場合や、課題を乗り越えても称賛が得られなかった場合は、欲求が満たされない。「手柄」や「独立」とは、他者との関係において初めて成立し、また、自己の能力によって主体的に何らかの課題を解決した時に得られるものである。太郎が求めている「手柄」の根本は「独立心」であり、それは漫画的な空想と結びついている。それは作品の前半部において一貫して描かれてきた。

しかし、この作品で重要なのは、当時としては珍しい現実に空想が入り込む形を取ったことである。²⁰それによって、魔法によって作られた物や現象が、パイプが太郎に初めての魔法を使うようにうながした言葉「論より証拠」に象徴されるように、現実や科学の論理や因果によっては説明できず、魔法の存在そのものによってしか説明できないものとして登場することとなった。

パイプ　ねえ、太郎さん、私たちのしたことがあんなにたびたび失敗したのは、いったいどういうわけだと思います？

太郎　それは、こうしたらどうなるかをよく考えもしないでやるから、しまいには理屈に合わなくなってしまうのさ……

パイプ　理屈に合わないとして失敗なんですか？

太郎　だって、そんなもの、誰も信用してくれないだろう？

パイプ　いいですか、太郎さん。それはね、子供たちが学校に行くか

らいけないんです……(五五話)

太郎は、魔法は「よく考えもしないで」使うと「理屈に合わなくなる」としている。重要なのは、太郎が信用を問題にしていることである。先述の通り、太郎が「大手柄」を目的とするかぎり他者との関係からは逃げるべきでないため、これは妥当な帰結である。しかしながら、パイプが述べるように、学校が存在するかぎり、魔法は成功することがないのである。つまり、魔法は科学を教える学校が存在するかぎり、理屈に合わず、信用されることはない。魔法と信用は両立できないのである。

現実に空想が入り込む舞台設定を行ったことで、太郎の持つ欲求とパイプの持つ魔法は、どちらも「スーパーマン」的なものでありながら、対立する存在となった。この後、作品は学校をやめるのか、魔法を捨てるのかという対立にシフトしていく。

ここで、太郎の空想と欲求が漫画やテレビなどと関わっていることを考慮したい。先述の通り太郎の空想は現実味を欠いた楽観性の強いものであることは指摘した。漫画やテレビなどのフィクション作品との同一化とも考えられる空想が物語を動かす大きな要素となっていることも指摘した。次に、当時そのような子供の「ごっこ遊びや、フィクションからの影響がどのように扱われていたかを確認したい。

当時、テレビやラジオによる影響を受けた子供がそれを真似して事故を起こす事例があり、それは新聞や雑誌によって批判されていた。²¹また、NHKの「放送基準」においてもそれに関する言及が見られる。²²そして、その批判は子供自身にも伝わっていたと考えられる。²³ヒロイ

ズムや空想への同一化は当時子供から見ても批判の対象だった。

しかしながら、前掲の「コードモとマス・コミ」からの引用からもわかるように、安部公房は子供がスーパーマンを好む理由を「英雄になろうとか、殺伐を好む」のではなく、「独立心」としている。その点で、子供の持つ空想をただ悪影響として捉えているのではないと考えられる。そして、そのような空想を持つ人物を意図的に主人公へと据えた。

「よい子ならざる子供」としての人物造形を持つ太郎と、スーパーマン的な力である魔法という「反教育的」な二つの要素が、現実と空想が入り混じる作風を取ったことで対立することになった。そして、その対立によって太郎は最終的に学校を選ぶという「教育的」な物語へと転化するのである。これが『ひげの生えたパイプ』の取った手法の大きな特徴の一つであると考えられる。

二、「セカイ系」と投書

『ひげの生えたパイプ』の後半部においては津久井太郎が学校をやるかどうかということが葛藤の中心となる。ここで安部公房自身が「代表的な投書を何かとあげては、それを主人公に告げ、投書の意見では問題が解決しないことを知らせるようにした。」²¹と述べているように、投書を通じて意識的に現実と作品世界を接続しようとしたことについて考えたい。語り手のような役目を果たす登場人物「アナウンサーA」は以下のように述べる。

A そうそう、そう言えば太郎君、君が学校をやめようかどうかどうしよう

かあんまり悩んでいるものだから、聴取者のお友達からもういぶんいろんな投書が来ていますよ。(中略)

A では、まず最初に京都府宇治市の原田健二君からのお便り……
 声 太郎君、今日は……ぼくはかかさず君の時間を聞いています。学校に行かないということ、ずいぶん悩んでいるようですが、パイプ君に頼んで、勉強している人や勉強していない人の頭の中に学校の勉強をぜんぶ入れてもらったら、学校をすいこんでも、先生をすいこんでも、かまわないと思います。では、さようなら……(七五話)

この後、他に三人の聴取者からの投書が紹介される。²⁵このようにして、意識的に投書を通じて現実と作品内部の世界をつなげることで、聴取者へと働きかけようとしていたのがわかる。聴取者の意見を、投書を通して登場人物である太郎に伝えることで、聴取者の作品への疑的な参加を促したと考えられる。ただし、あくまでも物語の決定を行うのは製作者側であるため、参加は疑的なものであると考えられる。そして、このような双方性は連続ラジオドラマという放送と創作が並行してなされた形式を活かしたことで生まれたのである。²⁶

東浩紀は「コンテンツ志向メディア」と「コミュニケーション志向メディア」という二つの形式を提示した。²⁷前者は「能動的な送信者」と「受動的な受信者」という非対称的な関係を持っており、「前世紀から存在するほとんどのマスメディア、出版、ラジオ、テレビ、映画、CDなどが、この分類に属する」とした。それに対し、後者は「双方向的なメディアを指している」とされており、ゲームとインターネットを例として挙げている。そして、後者を「新しい環境」として現代的なものとして

位置付けた。しかしながら、『ひげの生えたパイプ』の持つ特徴を見れば「コンテンツ志向メディア」としてのラジオドラマではなく、「コミュニティ志向メディア」に接近したものである。このラジオドラマが見えてくると考えられる。作者のもとへと集められた聴取者からの投書が登場人物からの言葉を付されて紹介されることで、さらなる議論と投書を促すのである。『ひげの生えたパイプ』はこんにち想像されているよりも双方向的であり、その点でいわゆる現代的なメディア環境や物語形式に接近していた。

重要なのは『ひげの生えたパイプ』の持つ聴取者の立場が東浩紀の述べる「プレイヤー」や「ユーザー」²⁸⁾に近い物であると考えられることである。ただし、ゲームのように操作を行う「プレイヤー」というよりも、「代表者」²⁹⁾である太郎の助言者としての参加が求められていると考えられる。その際、現実と空想が入り混じる作風は現実の聴取者をフィクションの中へと取り込んでいくという点で非常に大きな役割を果たした。また、現実との接続をより深めるために、『ひげの生えたパイプ』では、意識的に現実の子供たちの関心事を取り入れていったと考えられる。³⁰⁾ただし、あくまでも当時現代のようなゲームは存在していないと考えられるため、別の物を目指してこのような形式が取られたと考える。投書によって「代表者」に意見を伝え、数ある物語から自らの望む一つを選択しようとするのは民主主義の隠喩であると考えられる。その点で、「ゲームのような小説」と同じように名付けるならば、「民主的なラジオドラマ」であると言える。次節で扱うように、それは安部公房のアメリカへの注目と深く関係していた。

パイプ（ゆっくり）だからねえ、太郎さん、言ったでしょう……太郎さんが学校をやめるのは、第一歩だけど、もちろんそれだけじゃ駄目なんです。教室を吸い込んだり、先生を吸い込んだり、段々に手をひろげて、最後は全部の子供が学校をやめてしまうように……（中略）パイプ 子供は人間の王様、太郎さんはその中のまた王様……この世はそっくり「オトギの国」になってしまいます。（音楽 〇）それも、今のこのままの世の中のほうがいいとでも言うんですか？ 原子爆弾やロケットばかりつくっている大きな国……いじわるで乱暴な大人たち……汚職する政治家……泥棒、人殺し、貧乏……どれもこれも、みんな学校を出た大人たちのやっていることなんです……（二六五話）

前述の通り、『ひげの生えたパイプ』の後半部は学校をやめるか、魔法を捨てるのかという対立が物語の中核となる。第六十五話において学校をやめさせようと、パイプは説得を行う。パイプは「原子爆弾」や「泥棒」など、醜い現実を並べたてて太郎に魔法を選択させようとする。「今のこのままの世の中のほうがいいとでも言うんですか」というパイプの問いかけからわかるように、太郎にはそのような現実を改革する力が与えられている。重要なのは、パイプによって果たされた身体の拡大が限りなく大きいため、太郎が学校をやめるのかという選択はそのまま、科学的世界対「オトギの国」的世界という世界の在り方自体を問う対立へと拡大されていることである。つまり、太郎がパイプを手放すという行為はもはや個人レベルの選択ではない。その選択の中に聴取者たちの運命も取り込まれることになった。

このような世界の在り方と個人の決断が無媒介に結合されている物語の形式はいわゆる「セカイ系」に近いものであると考えられる。ここで重要なのは、二つの世界の在り方の選択が太郎に委ねられていることと、聴取者は投書を通してその決断に疑似的に参加することが出来るということである。聴取者である児童たちは教室で「主人公の運命について、二派に分れて論争をし」たことを明かす投書があったと安部は述べている。³² このような「二派」での「論争」は二つの世界の在り方の選択という大きな問題を用意したことで促されたものであり、その「論争」での立場は自分の望む未来あるいは物語の続きというものが前提になっていたと考えられる。つまり、安部は投書を引き出すため戦略的に大きな問題を用意した。そして、それが現代の「セカイ系」へと類似したと考えられる。

最終的に太郎は父の言葉によって魔法を捨てることを選ぶ。

父 いいかい、太郎……ダムを作ったのは、やっぱり、人間のチエと科学の力だったんだ……お前の大好きな魔法使いにも、ダムをつくることはさすがにできなかった……なぜかという、魔法使いは、思ったものを出すことは出来ても、思うことの出来ないものを出すわけにはいかなかったからさ……（八五話）

太郎はこの言葉を聞いて、「思うこと」が「チエ」や「科学の力」といった理論的な物によって制限を受けていることを知る。魔法は「真似」は出来ても「最初につくること」はできないのである。現実や自然や環境との格闘の中で、外界を征服していくことにより進歩すること

が出来るのである。³³

そして、この後、アナウンサーAが「これで「ひげの生えたパイプ」のお話もとうとうおしまいとなりました」と述べた後、太郎は聴取者に「ぼくの話も、おしまいです。だって、もう普通の子供になってしまったんだからね……」（八五話）と語り掛ける。太郎の決断によって現実の中に入り込む形を取った『ひげの生えたパイプ』は終わりを迎える。太郎は父の話聞き、「魔法より勉強の方が上」だと知っている。ヒロイックな空想と魔法のパイプを持っていた太郎が普通の少年へと自らの決断で戻っていくことで、逆説的に聴取者たちの現実を肯定している。であり、このような展開は東浩紀の述べる「感情のメタ物語的な詐術」の構造と類似している。³⁴

三、アメリカと「新しい英雄」

続いて確認したいのが、『ひげの生えたパイプ』が「スーパーマン」や「トム・ソーヤ」と言ったアメリカ的なものを持つ特質を拡大する方向を取ったことである。安部自身は「コドモとマス・コミ」において、「コドモがスーパーマンにあこがれを感じるのには、そこそ共通項なんだ」と述べている。「従属の状態」にある「コドモ」が「独立心」を持つっており、その願望の「形象化」として「スーパーマン」を好むことである。ここで、考えたいのが共通する願望が大衆や児童たちのような集団の「共通項」としてあり、それを捉えることで作家は大衆芸術を作り出すことができるという視点である。

この考えは児童向けに考えたものではなく、一九五一年頃の安部の

エッセイ「〈新しい英雄〉」で登場していた。安部はそこで「新しい英雄——それは、時代に関係するしかたの『典型』である」「典型的なプロレタリアートこそ、英雄であると言わなければならない。彼は人民の全願望の統一的表現である」「彼をめざめしめる鐘を打ちならす者が必要だ。それをコミュニストという」と述べている。³⁵つまり、「人民の全願望」や「典型」という言葉で表される集団に共通する願望を代表する「英雄」（「プロレタリアート」）がおり、「コミュニスト」がそれを目覚めさせるという構図である。「コードモ」、「共通項」、「スーパーマン」は、それぞれ「人民」、「典型」あるいは「人民の全願望」、「英雄」と対応すると考える。構図的には対象が「人民」から「コードモ」へと移動しただけで大きく変わったわけではない。

ここで、「人民の全願望の統一的表現」という言葉に注目したい。これまで論じてきたように、『ひげの生えたパイプ』においては、聴取者である子供の「共通項」である「独立心」を形象化したものとして魔法があり、それを行使する代表として主人公の津久井太郎がいる。聴取者は投書を通して彼の選択に疑似的に関わることができるのである。そして、それは民主主義の隠喩で捉えられると考えられるものだった。つまり、津久井太郎は「人民の全願望の統一的表現」とまではいかないまでも、集団の持つ願望を代表する立場にあると考えられる。このような「代表者」としての英雄像はラルフ・ワルド・エマソンのものに類似している。亀井俊介は「ともあれ、アメリカの民衆が待望し、夢想し、神話してきたヒーローは、つきつめていえばエマソンが論じたような、彼らが本来的に持つはずの力を「代表」して發揮する者であった」として、エマソン論じた「代表的人物」をアメリカ的なヒーローの祖型とし

て「アメリカのアダム」と呼び、位置付けている。そして、亀井はエマソンがトマス・カーライルの『英雄論』（一八四二年）に刺激されてカーライルとは根本的に異なる立場から『代表的人物論』（一八五〇年）を書いたと述べている。³⁷

ここで、「〈新しい英雄〉」において、安部が「資料」の一つとして「カーライル・英雄論」を挙げていたことに注目したい。カーライルの『英雄論』を訳した栗原孟男は「現代はカーライルを忘れてしまった」とくである」と述べている。³⁸その言葉を信用するならば、そのような状況において安部公房が「資料」として挙げているということは、安部公房も『英雄論』を読んだと考えられる。³⁹そうであるならば、「〈新しい英雄〉」はカーライルの影響下において批判的に書かれたと考えられる。その過程においてエマソンの英雄像と類似する英雄像にたどり着いたと考えられる。ここから、安部公房の「コードモとマス・コミ」における「スーパーマン」的なアメリカのヒーローへの接近は「〈新しい英雄〉」におけるカーライルの批判的な撰取から始まっていたと考えられる。

おわりに

以上、『ひげの生えたパイプ』に関して考察を加えた。安部は俗悪であるとされてきた「スーパーマン」や、批判されていた漫画的な空想と同一化する子供に「独立心」を見出し、それを作品内に取り入れて行った。一方で、パイプの魔法を登場させることで「力の展開」を描き、子供たちの心を掴もうとした。そして、その二つは空想と現実が入り混じ

る作品世界を構築したことで「教育的」なものへと転化した。このような「コードモとマス・コミ」から読み解ける『ひげの生えたパイプ』において取られた手法は、「〈新しい英雄〉」においてすでに現れていることを確認した。また、それはトマス・カーライルの影響下にあり、トマス・カーライルを通して、亀井俊介が「アメリカのアダム」と呼ぶヒーローの祖型を作ったエマソンと類似する考えに至っていることも確認した。そこから、安部がアメリカの大衆文化に興味を寄せるのは不自然ではないと考える。その点で、安部は「スーパーマン」から読み取ったと言うよりも、「スーパーマン」の方が安部の考えに合致したと考えられる。

また、連続ラジオドラマというメディアを生かし、投書を作品内部に取り入れた手法も確認した。それは、津久井太郎を「代表者」とする民主主義の隠喩で捉えることのできるものであったと考えられる。同時に、安部は『第四間水期』を書いており、そこで「予言機械」の開発者である勝見博士が未来を選ばされるという展開を描いたことを考えると、未来の選択というものは安部にとってこの頃の一つのテーマであったと考えられる。

本論ではまだ作品の骨組みを論じたのみにとどまる。『ひげの生えたパイプ』は長大な作品であり、作品内の個々のエピソードがどのように作品内で機能しているかを論じる必要があるだろう。

注

(1) 「ひげの生えたパイプ／人気の秘密」(『毎日新聞』朝刊ラジオ欄 一九

五九年七月十四日)

(2) 河原淳「ラジオ・テレビ人気番組 テーマ・ソング集」(『中学一年コース』三巻五号 一九五九年八月)において河原淳のイラストとともに楽譜が掲載されている。

(3) 安部公房原作 小林一夫絵「ひげのはえたパイプ」(『冒険王』十一巻 十十三号 一九五九年九月〜十一月)

(4) 木村陽子「第一章 (リテラリー・アダプテーション)という思想」(『安部公房とはだれか』二〇一三年五月 笠間書院)

(5) 守安敏久「ラジオドラマ『耳』『棒になった男』『赤い蔭』」(鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』二〇一三年十二月 森話社)

(6) 鳥羽耕史「メディアの越境者としての安部公房」(鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』二〇一三年十二月 森話社)

(7) 日高昭二「幽霊と珍獣のスペクタクル」(鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』二〇一三年十二月 森話社)

(8) 坂堅太「終章 「アメリカ」とナシヨナリズム」(『安部公房と「日本」―植民地／占領地とナシヨナリズム―』二〇一六年十月 和泉書院 初出『社会文学』第四十号二〇一四年七月)

(9) 安部公房・中原祐介「コードモとマス・コミ」(初出『文学』一九五九年三月号 一九五九年二月 全集十巻所収)安部公房の話聞いて中原祐介が執筆した。記号氏A・Bの対談形式をとる。安部自身は「コードモとマス・コミ」の末尾において「A・B両氏のいうことに異論はないし、ぼくもそうしかんがえにたつて実践するつもりで、コードモ向きの連続ラジオ・ドラマ(引用者注:『ひげの生えたパイプ』)を書きはじめているんだが(後略)」と述べている。

- (10) 笠井潔は「セカイ系作品に共通する傾向として、社会領域の消失に注目する観点もまた一般的だ。主人公が生きる家庭や学校などの小状況（私）と、グローバルな危機や破壊をめぐる大状況（世界の無媒介的な直結は、作品世界から社会領域が削除された結果でもある」と述べている「セカイ系と例外状態」(『限界小説研究会編』『社会は存在しない セカイ系文化論』二〇〇九年七月 南雲堂)。本論ではその定義に従う。ただし、『ひげの生えたパイプ』では、葛藤の中にダム争議が含み込まれており、その点で「社会領域が削除された」というわけではないと考えられる。
- (11) 東浩紀は『ひぐらしのなく頃に』における、作品世界に介入できず、読者と物語の関係を隠喩した存在だった「羽入」という人物が物語の第八編において作品世界に登場し物語をハッピーエンドに導き、それが語り手によって肯定されるという展開を例に出して説明している。現実世界の読者と作品世界をつなげ、作品内部で読者を隠喩する人物やその選択を隠喩する行為を肯定し、それによって現実の読者を肯定したように錯覚させるという方法を指していると考ええる。「第2章 作品論」(『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』二〇〇七年三月 講談社現代新書)
- (12) 安部公房「ラジオ童話への一つの冒険——児童文化の低俗化は作者の責任である」(初出『放送と宣伝 CBCレポート』一九五九年十一月号 一九五九年十一月 全集十一巻所収)
- (13) 手柄を求める太郎の台詞として「なにかすごい手柄をたてなきゃ……なにか、面白い事件はないかなア……大人も手を出せないで困っているような事件がさ」(三話)「ぼくはどうしても、大発見がしたいんだ！」
- (九話) 「本物の悪漢退治だ。本式に腕だめしができるわけだな」(二十話)「こんどこそはうんと計画をねって、本当に大手柄をたててみせるんだ」(二十話)がある。
- (14) 津久井太郎は作中に登場する漫画「探偵ジム」を好む人物として造形されている。また、第四十三話において「面白いものと言ったらマンガがばんばんきままっているじゃないか。」という台詞があり、津久井太郎が漫画好きの少年として造形されていたことがわかる。
- (15) (9)に同じ。
- (16) 滑川道夫・高山毅・国分一太郎・関英雄・東原健二郎・古田足日・荒正人・本多秋五・佐々木基一・平野謙・山室静「戦後児童文学の諸問題」(『近代文学』十四巻二号 一九五九年二月)
- (17) 安部は「コドモとマス・コミ」において「児童文学はコドモに現実的な生活を認識させるといふ、いわば教育至上主義的ともいふべきもので、これは、たとえば生活つづり方即文学といったせまい思想にもつながっているもの」として位置付けている。また、座談会「戦後児童文学の諸問題」における児童文学者国分一太郎の「なにか文学というものを非常にせまく考えて、リアリズムの文学と考えてみたりしてたとえばメルヘンなんというものの意味、あるいは空想とか想像とかいうものの意味については、非常にかたくなな考え方をもって、比較的排除するという方向にいったと私などはだいたい考えるのですけれども、いまの学校の先生たちは、その影響といいますか流れのなかにおりまして、いまでも児童文学者の、作家の書いた作品というものに対して信用していない」という発言や荒正人による「現在の児童文学には、まずリアリズムの作品でなければいけないという通念がある。そ

れというのも、つづり方運動が、その温床になったのじゃないですか」という発言がある。

- (18) 安部は「ゴドモとマス・コミ」において「児童文学にも作者の自己表現がなければならぬか、あるいは、児童文学というのは文学上のひとつの形式のことで、自己表現の必然性が、たまたま、児童文学という形式をえらばせたに過ぎないという高踏的なかんがえ」と位置付けている。おそらく、座談会「戦後児童文学の諸問題」における児童文学評論家の高山毅による「未明さんは文学形式として自分の行く道は童話だという線に來たんだ」「作家は自己表現、人生探求というものがなければいけないと思う。これが前提だ。ただそれが出る窓口が大人の方であったり、子どもの方であったり、ということではなければならぬ」といった発言などが念頭にあったと考えられる。
- (19) 『ひげの生えたパイプ』が放送されていた頃、KRテレビにおいて毎週木曜日七時三十分から八時まで劇映画として「スーパーマン」シリーズが再放送されていた。

- (20) (1)の新聞記事に「このドラマ(安部公房作、主題歌作曲芥川也寸志)の特徴は単なる空想の世界でも、生活話式式の現実ものでもなく、あくまで現実の世界のなかに、のびのびとした空想の世界がはいっている——ということ」と述べられている。一方で、(12)の記事において安部は広島県児童委員会から「この劇は丸でつくりごと」「勸善懲悪の主旨にかなうもの又は社会教育的劇が子供の時間にはほしいです」という批判的な投書が届いたことを明かしている。ここから、現実には「空想」が入り込む形式は当時としては挑戦的なものであったと考えられる。

- (21) 時代的には少しずれるが、一九五五年の斎藤秋男「児童文化」(『教育新潮』六巻七号 一九五五年七月)においてマンガ「アトムくん赤道をゆく」の影響を受けた児童が溺死したことが述べられている。他に、「アメリカの子供とテレビ」(『毎日新聞』朝刊家庭欄一九五九年二月八日)で、ボストン大学によるテレビの悪影響を否定する発表を紹介しつつ、結論として以下のように述べている。「しかしこんな明るい報告とは反対に、夜間遅くまでテレビに夢中になり、勉強を怠ったり、ギャングものの映画などで悪い影響を受ける子供も相当に多いことは事実です。問題は家庭がしっかりとっているかどうかということ、本人の常識ある判断次第でどちらにもころぶというわけです。」また、安部公房自身の言説として子供と娯楽のかかわりという論点に近いものとして「反平和的玩具」(初出『新潟日報』一九五九年二月六日号夕刊 全集九巻所収)がある。そこで、「がん具をいきなり戦争にむすびつけたりするのは、同じくらいにバカげたことなのだ。」「必要なのは、こどもから鉄砲をとりあげることではなく、むしろその使い方の正しい教育なのではあるまいか」と述べている。ここから、安部公房はそのような娯楽が子供に悪影響を及ぼすという言説からは距離を置いていたと考えられる。

- (22) 「児童がまねることによって害になる放送や児童に主旨が誤解されやすい放送はしない」「日本放送協会放送番組基準」第二章『放送教育』十四巻六号 一九五九年九月)

- (23) 中学生読者からの投稿を集めた記事「ラジオ・テレビ番組にもの申す」(『中学一年コース』三巻六号 一九五九年九月)において、島田明夫からの投書「ためになるものを」で以下の言葉が見られる。「七色仮

面」「怪人二十面相」などは僕たち中学生よりも、小学生に人気があるようです。こういう番組は、あまりためにはならないと思います。よく新聞や雑誌に、これらの番組に対する批判がのっているので、僕があらためていうまでもないことですが、これらの番組のまねをして、けがをしたり、死んだりした子供が数多くいます」同様の論点の批判は小野光郎、大久保浩司などの学生からも寄せられている。

(24) (12)に同じ

(25) このような投書の紹介は作品の序盤から何度か繰り返される。たとえば十四話ではAの台詞として「昨日の放送から、今までのあいだに、聴取者の皆さんから、電話が十四に、速達の葉書が七通、合計二十一通もの意見がよせられました。(中略)さっそく、太郎君や、先生方にも、お伝えしておきました……」というものがある。

(26) (12)の記事において放送中「毎日十七、八枚」執筆していたことを安部公房は明かしている。また、安部公房のエッセイ「アスピリン・ドラマ論」(初出『群像』一九五七年十二月号 一九五七年十二月 全集八巻所収)において、ラジオドラマについて「速達性を十分に生かした、ごくドキュメンタルな新しいスタイル、強いてドラマにひきつけていえば、完結性よりも同時性に立った「時間のドラマ」とでもいうべき、まったく新しい形式の発見に行きつくのではないかと思う」と述べている。投書作中に登場させることや創作と放送が並行してなされることは「同時性に立った「時間のドラマ」」の実践でもあったのではないかと考えられる。なお、付言すれば(1)の記事において、アナウンサーAの語り口は「実況放送のような感じ」と評されており、それも「同時性」を演出するのに大きな役割を果たしたと考えられる。

(27) 東浩紀「第1章 理論」(『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』二〇〇七年三月 講談社現代新書)

(28) 東浩紀は(27)において、「ゲームのシステムとネットのコミュニケーション」は、プレイヤー/ユーザーに物語への介入可能性を与える、つまりメタ物語的想像力を開くという点において、同じ機能を備えていると言えるだろう」と述べる。「メタ物語的想像力」(「キヤラクター」が物語から自立しており別の物語への登場を想像できるというものを開くことを「ゲームのシステム」の機能としている。太郎の選択は確かに物語的には一つであるが、ラジオドラマの同時性を考えるならば投書を行う子供にとっては多数の物語の可能性が想像されており、またその中で自らが望む物を選ばせるために投書があったと考えられる。それならば、投書は十分に「メタ物語的想像力」を開いたと考えられる。

(29) 安部公房は(12)の記事において「登場人物たちにたいする批評者にしたてた」という言葉を使っている。作中で紹介される投書には以下のように、太郎への批評が含まれるものがある。例として「せっかくすばらしいパイプをもっているのだから、もっと世間に役立つように使ってほしいという忠告だったんですよ。」(十八話「せっかくすばらしいパイプ」を持っているんだから、もっと世の中の役に立つことをしなさい。さようなら……山形市・掛屋一郎」(六十一話)がある。重要なのは、パイプという道具を太郎が持っており、その使い方について批評がなされていることである。道具である以上、それは譲渡可能であり、津久井太郎という人物は立場的には交換可能である。「力」を「代表」して持つ人物として太郎を解釈できる。「代表者」という考えは亀井俊

- (30) 例えば、宇宙ブーム、貝塚発掘などの歴史ブームの存在が挙げられると考える。宇宙ブームについては、第二十九話において、芳子達が訪れた宇宙博覧会で解説者が言う「では、最後に、もっとも最新のニュースを申し上げます」と以下の「火星の二つの月」についての解説は「火星人が打ち上げたものか／その衛星／コムソモリスカヤ・プラウダ紙から（上・下）」（『朝日新聞』朝刊文化欄 一九五九年五月十四～十五日）が材源になっていると考えられる。そのため、積極的に最新の情報を作品内部に取り入れていったと考えられる。歴史ブームに関しての同時代の言説として「近頃、学生などが夏休みなんかには、やたらに古墳などを掘りまくるでしょ。」という高木健夫の発言があり、発掘が子供たちのブームだったことが推測される（立野信之・南条範夫・高柳光寿・高木健夫「座談会 “人気呼ぶスーパーマン”」（『労働文化』一〇巻十一月一九五九年十一月））。
- (31) アナウンサーAは以下のような台詞でこの決断についての投書を促す。「結局太郎君は、決心をつけかねたようですよ（中略）それとも、なにか名案がありますか？ あつたら、どうぞ教えてやって下さい。太郎君は皆さんのおたよりを、とつてもたのしみにしているのです……」（六五話）しかし、結末を決めるのはあくまでも製作者であり、このような疑似的な選択は東浩紀の挙げた「感情のメタ物語的な詐術」に近い。「第二章 作品論」（『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』二〇〇七年三月 講談社現代新書）
- (32) (12)に同じ
- (33) 安部公房はそのような外界への変革について「人間は労働によって環境の肉体的制約を突破し、技術によって五感や思考を拡大してきた。（中略）人間が社会的動物である以上、人工衛星もまた社会的生産物以外のなものでもないわけだ。」と述べている。「1957・アルファの逆説」（初出『みづゑ』一九五八年一月号 一九五八年一月 全集八巻所収）
- (34) 東浩紀「第二章 作品論」（『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』二〇〇七年三月 講談社現代新書）
- (35) 安部公房「（新しい英雄）」（初出「原稿」『創作ノート 1951』一九五九年頃 全集三巻所収）
- (36) 亀井俊介「3 アメリカのアダム」（『アメリカン・ヒーローの系譜』一九九三年十一月 研究者出版）。ただし、エマソンの立場は人間の内部に「神」や「自然」や「神性」を設定し、それを「代表」し発揮する人物として英雄を捉えた。その点で安部公房とは少しずれが生じる。
- (37) (36)に同じ
- (38) 栗原孟男「訳者後記」（トマス・カーライル著 栗原孟男訳『英雄論』一九四九年二月 育生社）
- (39) 「（新しい英雄）」は『安部公房全集』三巻「作品ノート3」によると『創作ノート 1951』に書かれており、出版されて世に出回った作品ではなく、私的な目的のために書かれたものであると予想される。創作ノートであるため、今後作品を書いていくために書かれたものであると考えられる。そのため、作品末尾に書かれた「資料」は「（新しい英雄）」執筆時に安部公房が読んでいた本や作品ではなく、今後分析し参考にする作品を挙げたものであるとも考えることができるため、

安部公房が読んだと断言することが難しい。また、「ジャンヌ・ダーク」「ニーチェ」「ナポレオン」のような歴史上の人物や「水滸伝」「八大伝」のような古典作品の名も挙げられている。そのため、読んだとは断言はできない。ただし、『英雄論』の名前は資料の二番目に挙げられている。また、カーライルの『英雄論』の原題は *On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History* であり、『英雄崇拜論』や『英雄及び英雄崇拜論』と訳される場合もある。また、一九四九年五月に岩波文庫から刊行された老田三郎訳は『英雄崇拜論』と訳している。しかし、『英雄論』という名前を挙げていることから、そのように訳された本を知っていた、読んだことがあるということが推測される。読んだとすれば、おそらく、栗原孟男訳のものであると推測される。また、「資料」の中でも「プルーターク英雄伝」に続いて二番目に名前を挙げている。それらの事情と栗原孟男の言葉を合わせて考えると、読んだという断言はできないものの可能性は高いと言いうことができるだろう。一九五一年までの範囲では、管見の限り以下のような訳書が確認された。①石田羊一郎・大屋八十八郎訳『英雄崇拜論』（一八九三年十一月 丸善株式会社書店）、②土井林吉訳『英雄論』（一八九八年五月 春陽堂）、③土井林吉訳『英雄論』（一九〇九年五月 岡崎屋書店）②の改訂版、④栗原元吉訳『英雄研究』（一九一二年十二月 東亜堂書房）、⑤中村古映訳『英雄崇拜論』（一九一四年十月 日月社）、⑥住谷天来訳『英雄崇拜論』（一九一六年八月十二版 警醒社）、⑦柳田泉訳『英雄及び英雄崇拜』（一九三三年四月 春秋社）、⑧柳田泉訳『英雄及び英雄崇拜』（一九四九年三月 春秋社）、⑨栗原孟男訳『英雄論』（一九四九年二月 育生社）、⑩老田三郎訳『英雄崇拜論』（一九四九年五月 岩波

文庫)

付記

安部公房の本文引用に際して『安部公房全集』（新潮社 一九九七—二〇〇九年）によった。

（おくむら なおひろ、広島大学大学院博士課程前期在学）